

生徒の意欲を高める評価の研究

国語科授業における自己評価能力を育てる評価方法の開発

仁淀川町立吾川中学校 教諭 和田 智江

1 はじめに

新しい教育評価では、目標に準拠した評価(いわゆる絶対評価) 指導と評価の一体化、多様な評価の活用が柱となる。特に、指導者の立場としては指導と評価の一体化を進め、学習評価を指導の改善や発展・深化に生かすことが求められる。そのためには学習の結果についての評価だけでなく、学習過程における評価を重視しなければならない。

一方、学習者の側に立った場合、自己の学習過程や学習成果を客観的に見つめさせ、その後の学習を設計する力を身につけさせることも教育的な課題といえる。学習者の自己評価能力を向上させるためには、学習意欲を高め、確かな学力の育成に発展させることができるような自己評価の開発を目指す必要がある。そこで、再生刺激法とルーブリック評価法を採用することによって、学習者に自らの学習過程を厳しく見つめさせ、真の自己評価を促す評価方法の研究に着手した。

2 研究仮説

- (1) 指導者が学習者の学習達成度や内面を把握することによって、指導と評価の一体化が図れ、その後の指導の補充・深化や授業の改善、個に応じた指導に役立てることができるだろう。
- (2) 学習者が自らの学習達成度を自己評価し原因を自覚することによって、自己の課題をとらえ、その後の学習を改善することができるだろう。

3 研究内容

(1) 理論研究

教育課程審議会答申「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」の理解
自己評価についての研究

評価方法についての研究(再生刺激法、ルーブリック評価法)

国語科で育成する学力についての研究

(2) 実践研究

学習指導目標、評価規準、評価基準についての研究

学習指導案の構想

検証授業(・ ・)の実施、分析

4 自己評価

これまで多くの教科の授業で、自己評価は主要な教育評価の方法として広く採用されてきた。また、今後の教育においても、自己評価は多くの評価の中で最も重要なものとして位置づけられるであろう。しかしながら、これまでの自己評価のあり方について、その目的や方法に多くの反省点が出されているのも事実である。その一例をあげると、(1)自己評価の習慣化が子どもにとって自己評価の必要性を感じられるものではなく形骸化している、(2)自己評価活動の結果が、授業改善や子どもの変容に結びついていないなどである。このような問題点を改善していくことが今後の大きな課題である。

本研究では、再生刺激法やルーブリック評価法という評価方法を用いて、真の自己評価活動を促し、それを継続することによって自己評価の習慣を身につけさせることができれば、学習意欲の向上や学力形成に役立たせることができるという仮定のもとに、再生刺激による授業実践とルーブリック評価

による授業実践を行った。以下に紹介する。

5 検証授業（再生刺激法を活用した評価の研究）

(1) 研究目的

国語科の一単元分の授業を用いて継続的な自己評価を実施することにより、個々の生徒の認知面や情意面の深まりの過程を分析し、その結果から授業改善の手がかりや個に応じた指導のあり方を探る。

(2) 研究方法

授業終了直前の5分間、授業における認知面と情意面の自己評価をさせる。

自己評価は再生刺激法によって行う。

再生刺激法とは各授業における最も重要なポイント、すなわち生徒が最も深く思考する場面を想起し、その中で生徒がどのように意欲的に取り組んでいたか、また、どのような思考をめぐらせていたかを質問紙によって問う方法である。

上のような手続きで得た継続的な評価資料をもとに、情意面と認知面の変容の過程を学級全体レベルと個人レベルから分析し、授業の深まりの過程を明らかにするとともに、授業の問題点や改善の方策についての手がかりを得る。

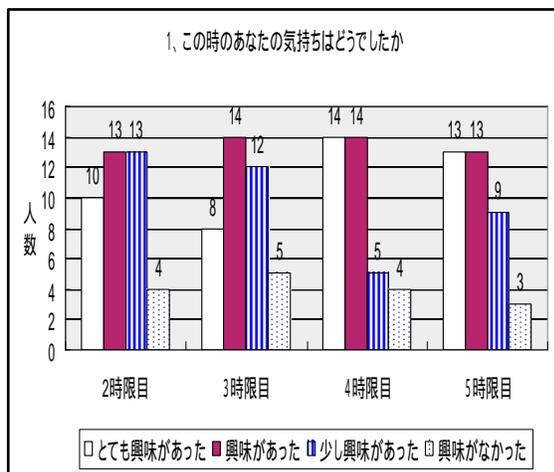
(3) 結果と考察

情意面の結果と考察

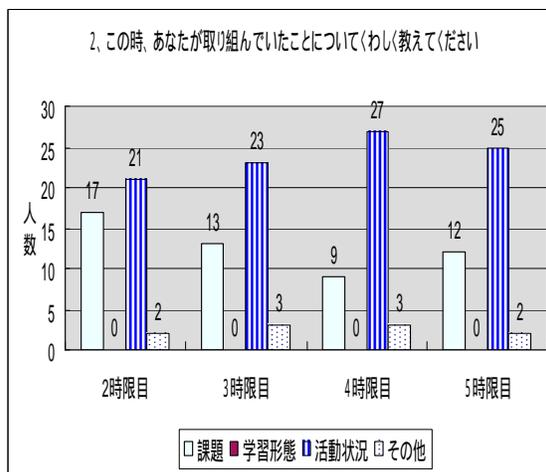
図1より全般的に多くの生徒が高い興味を示し、その対象が「学習内容」であることがわかった。しかし、興味の深さという観点から分析すると、必ずしも高いレベルまで達していないという結果が得られた。

認知面の結果と考察

図2より、学習以外のことに言及した生徒はほとんどなく、課題に関わった適切な認知活動、及び適切な学習活動を行っていたという結果が得られた。しかし、学習に取り組んではいるが、その中身を分析すると思考のレベルが浅く、学習の深まりがないことがわかった。これは、深い考えを引き出すような授業ではなかったことを示している。



< 図 1 >



< 図 2 >

成果と課題

再生刺激法を用いて生徒に学習の過程を振り返らせ、認知面・情意面の把握を行った結果、指導者による生徒の様相観察などではとらえられなかった内面を把握することができ、授業改善や個別支援に役立てることができた。しかし、再生刺激法は指導者には生徒の内面に関する多くの

評価情報をもたらす方法であるが、学習者が自らの学習過程を振り返り、次の学習を見通すような自己評価活動に発展させるには、さらなる工夫が必要であるという問題点が残された。

6 検証授業（ルーブリックを活用した評価の研究）

(1) 研究目的

学習評価において、思考力や判断力など高次の目標を質的に把握するために登場したのが、「ルーブリック（成功の度合いを示す数段階程度の尺度と、それぞれの尺度に見られるパフォーマンスの特徴を示した記述語から成る評価基準表、評価指標ともいう）」である。ポートフォリオの広がりとともに各教科で取り入れられ、盛んに研究されている。しかしながら、教育実践において、ルーブリックは主に指導者の評価指針としては活用されるが、学習者には提示されることが少なく、学習者のための評価方法にはなり得ていないなどの問題点が指摘されている。

検証授業では、評価規準および評価基準表（ルーブリック）を、指導者と学習者がともに活用し、それぞれの評価活動に役立てることを目的とする。学習者にはルーブリックに従って自己評価活動を行わせる。そして、その結果から次の学習を見通させ、意欲的な取組を促していく。指導者は、ルーブリックを生かした評価によって得られた情報を活用し、学習支援や授業の改善を行う。

(2) 研究方法

指導者は単元で身につけてほしい力を生徒に提示し、理解させる。

指導者は学習目標を提示し、生徒と共有する。

指導者は、授業の初めに目標の達成状況を測る評価基準表（ルーブリック）を示し、生徒に自己目標を設定させる。ルーブリックは基準A（十分満足できる）、基準B（おおむね満足できる）、基準C（努力が必要）、基準D（さらに努力が必要）の四段階に分け、AかBのいずれかを自己目標として選択させる。これを設定目標とする。

授業終了後、生徒はルーブリックを使って自己評価し、目標に対する達成状況を明らかにする。これを達成した基準とする。さらに、設定目標と達成した基準の違いに着目させ、そのような結果になった理由と改善の方法について記述し、次の学習の方向性を探る。

指導者はルーブリックに従って生徒の達成状況を評価し、十分ではない場合は学習支援を行ったり、次の授業の修正を行ったりする。指導者における評価と生徒の自己評価の差異に着目し、指導や支援の方法を考える。

単元のルーブリックを検討し、改善する。

(3) 結果と考察

自己評価の結果と考察

図3は自己評価の結果、「達成した基準」を目標ごとにまとめたグラフである。ただし、基準Dと申告した生徒は一人もいなかったため、基準Dは省いている。

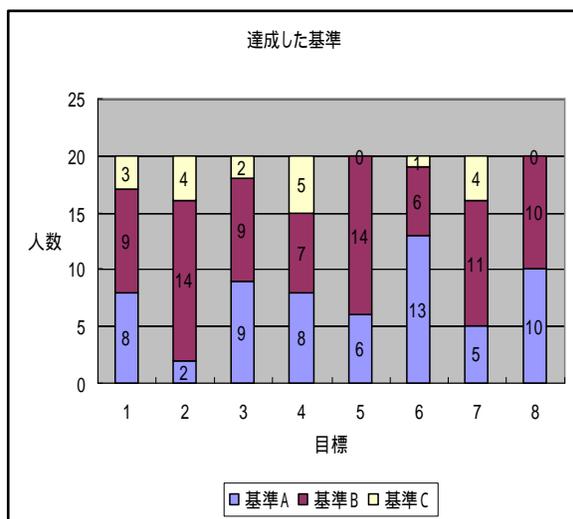
自己評価の記述を見ると、ほとんどの生徒が学習過程を振り返り、よかった点やよくなかった点について具体的に反省している。例えば、「筆者の言いたいことが書かれているところを見つけて、筆者の考えを確かめたが、筆者の考えと同じような例をあげることができなかった」など、達成できたかできなかったかというだけでなく、達成できた事柄、達成できなかった事柄が詳しく分かる。「今回できなかったことを、次はできるようにしたい」という記述は、どうすればより上のレベルの達成ができるかということに自覚した上で、次の学習目標を立てていることを示している。自己評価をする時点で、次の学習への取組を始めているのである。生徒自身が次の目標を設定し、どうすればよいかということに明確にした上で学習することができれば、主体的かつ意欲的な学習が展開でき、学習定着度も高まると期待できる。このように、ルーブリックを用いて自己評価を行うと、自己の達成状況を明らかにするだけでなく、さらに上のレベルを達成

するにはどのような学習が必要かということをはっきり自覚することができるのである。

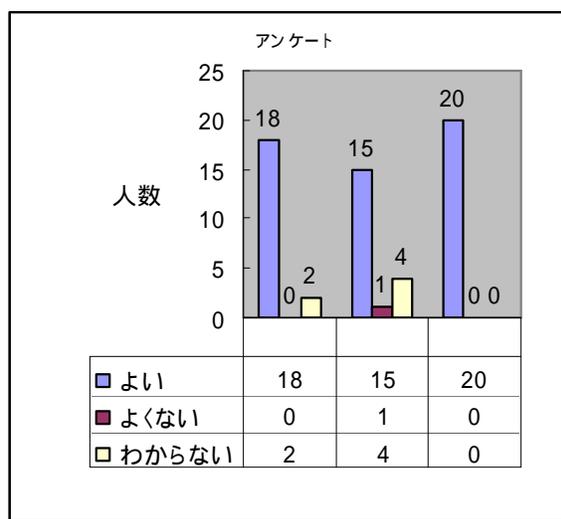
アンケートの結果と考察

図4は次の から の項目について、「よい・よくない・わからない」から選択させたアンケートの結果である。どの項目についても「よい」の割合が高く、ルーブリックが肯定的に受け止められ、活用されたことがわかる。

授業のはじめに基準（A B C D）を示したことをどう思うか。
 基準（A B C D）についてどう思うか。
 目標（A B C D）を決めることは、学習の役に立つと思うか。



< 図 3 >



< 図 4 >

成果と課題

ルーブリックは学習の指針として活用できることがわかり、国語科の学習評価方法としての有効性が認められた。また、ルーブリックを活用すると、生徒がやる気を持って学習できるというアンケート結果が得られ、生徒の学習意欲を高める効果を確認することができた。しかし、ルーブリックは指導者が作成し、生徒に与えたものであったために受動的な側面があること、ルーブリックを生徒に理解させるためには丁寧に説明する時間が必要であること、ルーブリックを理解できなければ自己評価に活用することができないことなどの課題が残った。

7 検証授業（生徒とともにつくるルーブリックを生かした授業づくりと評価に関する研究）

(1) 研究目的

検証授業 は検証授業 を発展させ、「生徒がつくるルーブリックを生かした授業づくりや評価に関する研究」というテーマで取り組んだ。ここでは、生徒自身がルーブリックを作りながら学習目標を理解し、学び方を習得することをねらっている。ルーブリックの作成そのものが学習目標に向かう深い学びを実現すると考えるからである。そのために生徒が中心となって単元の学習目標を立て、学びの質的なレベルを示したルーブリックを作成する。その作成過程が学習の手引きの役割を持ち、順序立てた学び方を理解させ、到達レベルを意識させる効果がある。また、当然ルーブリックは学習目標実現のための指針として活用される。ルーブリックに従った自己評価を実施すれば、学習者はそれを次の学習に生かし、自己の学習の改善やより深い学習につなげることが可能となる。

(2) 研究方法

指導者は生徒の実態を把握し、課題をふまえた上で単元で身につけさせたい学力を明確にする。生徒とともに学習目標を作り、生徒の意見を取り入れながら単元の学習内容を決める。

生徒は課題作文（第一作文）を書く。

単元の学習目標（評価規準）を生徒と指導者が共有する。

学習目標の達成状況を図る指針（ルーブリック）を生徒が中心となって作成する。ルーブリック作成にあたっては、四つの注意事項をあらかじめ確認しておく。

- 1 ルーブリックはA B C Dの四つに区分し、Aは十分満足できる、Bはおおむね満足できる、Cは努力が必要である、Dはさらに努力が必要であるというレベルにする。
- 2 学習目標（評価規準）はBに反映することとし、AはBよりも優れたものがある、CはBよりも不十分な点がある、DはCよりもさらに不十分な点があるとなるように文章を工夫する。
- 3 単元の目標を達成するためには、AかBの達成が必要であることを基本にして文章を工夫する。
- 4 自己評価に活用することができるように、できるだけ具体的な文章にする。

作成したルーブリックを活用して、第一作文と同じ課題で課題作文（第二作文）を書く。

ペアまたはグループで作文の相互評価を行う。

相互評価を生かして自己評価をし、二つの作文の比較・分析を行って達成状況をはかる。

ルーブリックの見直しを行う。

(3) ルーブリックの作成

それぞれの学習目標についてルーブリックを作成した。

学習目標	A（十分満足）	B（おおむね満足）	C（努力が必要）	D（さらに努力が必要）
課題作文に必要な材料を取捨選択する。	作文の主題(大事なこと)についての材料を選ぶ。	作文に書く材料を選ぶ。	他の人に助けをもらって材料を選ぶ。	作文に書く材料を選ぶことができない。

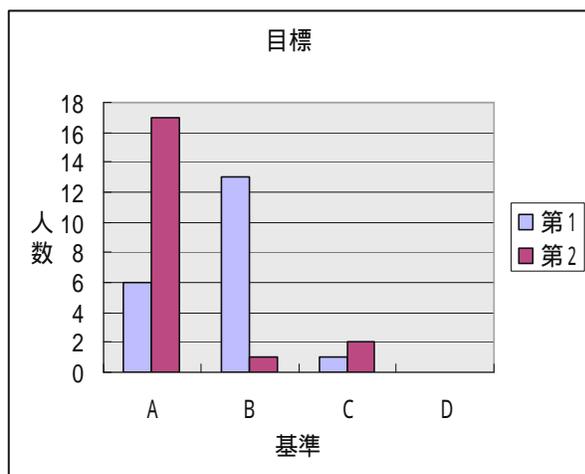
評価規準をBに表し、Cは「自分の力だけでは難しくても友達や先生に助けをもらえばできる」というレベルで共通化した。Dは何もしない、できない状態をイメージした。最も難しいAの文言は、第一作文を書いたり読んだりした学習をもとによりよい作文の条件について話し合い決定した。

(4) 結果と考察

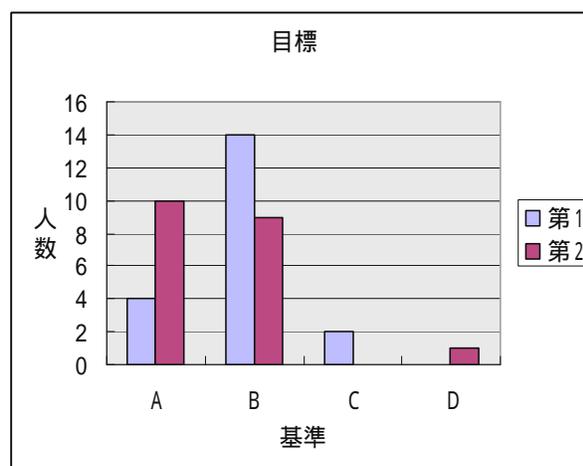
第一作文と第二作文の比較（図5：目標、図6：目標）

目標：身近な生活や学習の中から課題を見つける。

目標：作文の構成を決め、順番に従ってまとめる。



<図5>



<図6>

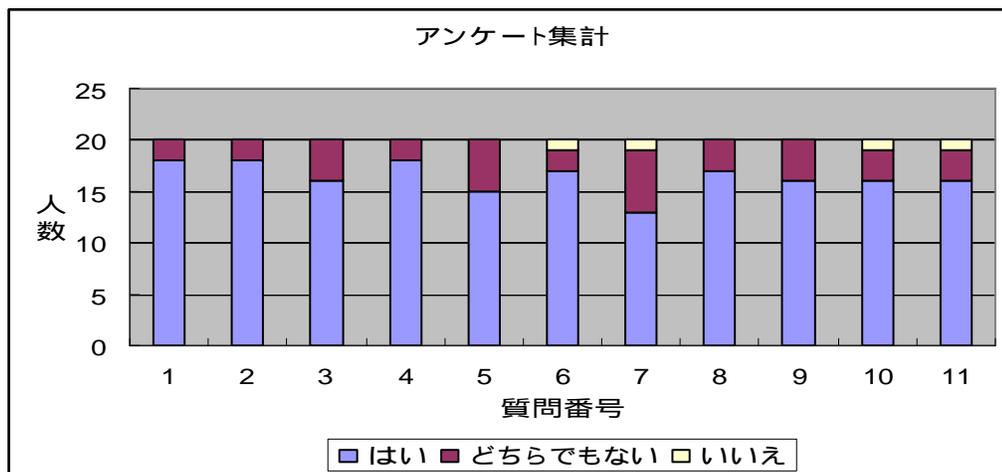
図5、図6から、第一作文よりも第二作文の自己評価が高いことがわかる。評価が上がった生

徒は、向上した点や向上した理由について具体的に記述している。例えば、「課題について調べたことによって自分の知識が増えたから、作文の内容がよくなった」という記述では、何を、どのようによくなったのかという振り返りができていて、振り返りに深まりが見える。また、生徒の意欲面にも効果があることがわかった。例えば、「・・・をしようと思って取り組んだ」や「目標を意識して学習した」などという報告が多数あり、自己目標を達成しようという思いが学習行動の原動力になっていることがわかった。達成した基準が変化しなかった生徒も、「前の話し合いでもきちんと意見を言って話し合ったけど、今回のほうが意見を多く言えた」というように、第一作文よりも学習の内容が向上したと自己評価している。このように、学習のステップが確実にふめると学びの質が向上し、書いた作文の満足度も上がるということがわかった。

アンケートの結果と考察

次の1から11の項目について「はい・いいえ・どちらでもない」から選択させたアンケート結果が図7である。生徒が中心となってルーブリックを作り、学習の指針として活用することは学習を活発にし、学習意欲を高める効果があると確認できた。

- 1 ルーブリックを使って学習すると、ルーブリックを使わない学習よりも意欲が持てましたか。
- 2 みんなで話し合っって作ったルーブリックは、活用しやすいと思えましたか。
- 3 ルーブリックに従って自分で目標を立ててから学習すると、やる気ができましたか。
- 4 ルーブリック作りをすることで、学習（作文を書くこと）の進め方が分かりましたか。
- 5 ルーブリックを使うことによって、より高い目標を達成したいと思うようになりましたか。
- 6 ルーブリックを使うと、作文が書きやすくなりましたか。
- 7 満足できる作文が書けましたか。
- 8 ルーブリックを使って自己評価すると、自己評価がしやすくなりましたか。
- 9 ルーブリックを使って自己評価すると、どのようにすればよりよい学習ができるかということが分かりましたか。
- 10 今後課題作文を書くときは、みんなで作ったルーブリックを活用して書こうと思えますか。
- 11 積極的に話し合いをし、ペア活動を進めることができましたか。



< 図7 >

成果と課題

ルーブリックづくりが学習の指針となり、作文の書き方を理解することによって作文が書きやすくなることがわかった。教師が作成したルーブリックを活用するのは違い、生徒どうしで話し合い、作り上げる過程で自己の中に評価指標ができていく。説明して理解させるという手順をとらなくても、学習のステップを学び、学習を見通すことができる。

次に、自己評価に活用しやすく、より深い学習を自覚させる効果があることもわかった。これは、アンケート結果や自己評価の記述、進んで資料を検索したり、よりよい作文を目指して何度も構成を考え直したりする姿勢が見られたことからもうかがえる。

このように学習目標（評価規準）およびルーブリックを学習者がつくることによって、学び方を理解した、意欲的な学習を展開することができる。特に、作文やスピーチというような質的な深まりのある学習において効果を発揮すると考えられる。また、評価活動を継続することによって、学習の質的な深まりが生まれ、自己肯定感や学習意欲が向上する効果も期待される。

最大の課題は、ルーブリックの作成に時間がかかることである。効果は大きいですが、実際の教育課程では時間的な問題が生じる。生徒の実態や教科で育成したい学力、単元や教材の性質などを合わせて検討し、単元を選択するなどして研究や実践を進める必要がある。

8 研究の成果と今後の課題

研究の結果「再生刺激法を取り入れた自己評価」および「ルーブリックを取り入れた自己評価」は、指導と評価の一体化や学び方の習得、自己評価能力の育成のために有効な方法であることがわかった。

まず、指導者は、生徒が何を考えているか、学習内容がわかっているか、何がどこまでできているか、何に興味をもっているかなどの具体的な評価情報により、指導の改善や個に応じた指導・支援を行い、指導と評価の一体化を図ることができた。

次に、学習者は学習過程を振り返り、次の学習を見通し改善することによって、より高い基準の達成を目指して学習することができた。つまり、自己評価によって自己の学習過程のモニタリング、学習の結果に関する評価や自己強化などが図れたということである。一連の学習過程をとおして主体的な学習活動を展開できたという結果から、多くの評価方法の中でも、ルーブリックは問題解決的な学習において高い教育的効果を発揮するという結論を導き出すことができた。

課題としては、本研究で用いた再生刺激法やルーブリック評価法の問題点を補い、よりよい評価方法を研究開発することがあげられる。まず、再生刺激法は自己評価能力の向上に効果的とはいええないという問題がある。また、ルーブリックは作成に時間がかかることをはじめ、長期的な評価には活用できない、ルーブリックの作品をまねたり点数にこだわったりする弊害がうまれるなどの問題がある。

今後は、再生刺激法やルーブリックを継続して研究し、その用途を広げるとともに、別の方法や複数の方法を組み合わせることを考えている。実態と課題に目を向け、理論研究をもとにした授業実践に取り組んで、学校教育に役立つ教育評価の研究を深めることが課題である。

<主な引用・参考文献>

安彦忠彦『自己評価 「自己教育論」を超えて』図書文化社、2002年。

倉澤栄吉・野地潤家監修『朝倉国語教育講座5 授業と学力評価』朝倉書店、2004年。

辰野千壽・石田恒好・北尾倫彦監修『教育評価事典』図書文化社、2006年。

田中耕治編著『新しい教育評価の理論と方法 第 巻 理論編』日本標準、2002年。

西岡加名恵『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法』図書文化社、2003年。

三宅喜久子「ルーブリックの作成と運用に関する実践的研究」岡山大学大学院修士論文資料、2004年。

吉崎静夫『教師の意思決定と授業研究』ぎょうせい、1991年。

吉崎静夫『理科・算数科の授業における児童の認知過程と教師の意思決定に関する研究 平成2・3年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書』1992年。

『児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について（答申）』教育課程審議会、2000年。

『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説 国語編』東京書籍、2004年。

『評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料（中学校） 評価規準、評価方法等の研究開発（報告）』国立教育政策研究所教育課程研究センター、2002年。